二〇二三年コスモス全国大会の記

東京／アルカディア市ケ谷

一日目全体会

四年ぶりとなる二〇二三年コスモス全国大会は、今年高野公彦氏よりバトンタッチされた新編集人、小島ゆかり氏の挨拶で開幕した。長いコロナ禍、猛暑など困難のなか、みなさんよくぞ生き延びて参加してくださった、とにこやかに述べられ、くつろいで過ごしてほしいが、旧交を温める時はどうぞ慎重に、と締めくくられた。

つぎに塔短歌会選者であり、現代歌人協会初めての女性理事長として活躍されている歌人、栗木京子氏の講演に移った。

演題は「現代を映し出す歌」。長いコロナ禍は全世界の人々に多大な影響を与えた。出来事を詠う場合、出来事を述べるだけでなく、歌人としてのレスポンスを詠い込みたい、と述べられ、現代歌人協会編の二冊の「コロナ禍歌集」と新聞歌壇から歌をひいて、軽妙ながら鋭い切り口で講じられ、とても勉強になった。

その後、この三年開催することができなかった授賞式が行われ、コスモス賞、O先生賞、桐の花賞、純黄賞、評論賞、随筆賞の各受賞者に、前編集人高野公彦氏より賞が授与された。

大会場からAからEまで5つの

大会日程

第一日　10月8日（土）

11時30分～12時20分　受付
12時30分～12時40分　開会挨拶　小島ゆかり
12時40分～13時50分　講演　栗木京子氏　「現代を映し出す歌」
14時00分～14時20分　各賞表彰（二〇二〇年～二〇二三年分）
14時40分～16時30分　歌会Ⅰ
〈A〉助言者：小島なお・高野・福士・松尾　司会：前中
〈B〉助言者：大松・狩野・橘・田中・藤野　司会：森田
〈C〉助言者：小田部・風間・小島ゆかり・津金　司会：豊島
〈D〉助言者：奥村・影山・木畑・鈴木竹志・水上　司会：米田
〈E〉助言者：大野・桑原・鈴木千登世・田宮　司会：四野宮
16時30分～18時30分　題詠制作（「窓」と「人名」のある歌）
18時30分～20時30分　懇親会

第二日　9月23日（日）

9時30分～11時40分　歌会Ⅱ
11時50分～12時20分　総評・表彰
12時30分～14時30分　さよならパーティー

［参加者名簿］〈北海道〉伊藤てい子・稲場洋子・斎藤嶺也・新保弥代枝・高橋妙子・浜野昌子・瓢子朝子〈青森〉福士りか〈岩手〉工藤玲音・千葉喜恵・吉田史子〈茨城〉伊藤祐楓・渡辺南央子〈埼玉〉田中愛子・丹波真人・中津川勒坐・宮内博子・村田淳子〈千葉〉伊沢玲・大西淳子・尾崎潤子・影山一男・風間博夫・黒岡美江子・小栂礼子・高野公彦・豊島秀範・

グループに分散し、約二時間楽しく歌会を行ったのち、「お題」で一首実作するために、各自一時間ほど呻吟することとなった。

お待ちかねの懇親会は、伊那谷トリオの華麗なチアダンスにはじまった。勢いづいた参加者は大いに飲み、食べ、笑い、歌友との再会を喜んだ。（坪井真里）

Aグループ歌会（Ⅰ・Ⅱ）報告

栗木京子氏にもアドバイザーに加わっていただき、前中映氏の司会で、二十代から九十代まで活発に意見交換した。一首につき二名の評者と選者が評を述べたが、多様な評が飛び交い、濃密な時間を過ごすことができた。

・ひとつ落ちひとつ膨らむ沙羅の花　雲流れゆき涅槃のひかり

観察が行き届き無常観が表されている、という評の一方、福士りか氏より「魅力的な歌だが、体言止めの場合、読み手は動詞を補って読むことになる。それを避けるかその動詞を入れて作るのが良い」とアドバイスがあった。

・この家に鋏はみっつそのうちのふたつはわたしが失くしてもいい

「滞空時間の長い、魅力的な歌」「鋏のもつ攻撃性も感じる」とあった一方、「最近暮らし始めた夫婦のちょっとした緊張感がよく表現されている」と丁寧な評を述べる人がいて、いい読み手が歌を生かすのだなあと納得した。

高野公彦氏は「ひらがなが多く音楽性があり、ドラマもある。歌の音楽性は大事」と述べ、また推敲も大切で最低三日間、と繰り返された。（坪井真里）

長谷川純子・藤野宏子・役重隆子〈神奈川〉鮎沢永二・石原佳子・井鍋幸子・加藤久子・河北笑子・鈴木久美子・高橋美羽子・谷真樹・津金規雄・土屋美代子・人見江一・福島健太郎・前田明・松村千津子〈東京〉荒川ゆみ子・池田恭子・石川るみ子・岩本豊子・大松達知・奥村晃作・勝木尚子・狩野一男・河地伯子・桑原正紀・小島なお・小島ゆかり・小林登喜恵・四野宮和之・柴田佳美・関矢展子・坪井真里・中村敬子・能勢玉枝・藤田邦彦・本土和子・前中映・松尾祥子・水上比呂美・宮梓一・森田卓子・矢沢靖江〈新潟〉黒石孝・佐藤彩湖・佐藤多佳子・橘芳圀・田宮朋子・山下佐保〈富山〉中川暁子・西嶋圭子・西村好美〈福井〉内藤丈子〈長野〉有栖透・今村日出子・木内賢隆・斉藤淳子・野村房子・洞田哲子・三浦陽子・山田宗夫〈静岡〉梅沢佳子・小田部雅子・白川ユウコ・榛葉貞代・杉本なお〈愛知〉柴田有里・鈴木竹志〈三重〉森田治生〈京都〉岡田美子・木畑紀子〈大阪〉田中泉〈兵庫〉中村京・藤岡成子・三沢左右〈奈良〉川村秀子・米田靖子〈鳥取〉石田信夫〈広島〉菊山正史・久保田智栄子〈山口〉鈴木千登世・百留ななみ〈福岡〉有川知津子・大野英子・福田春子・藤野早苗・永田恵美・中村仁彦〈長崎〉立石千代女・安田博行〈鹿児島〉丸山克介（以上百十九名）

大会詠草（Ⅰ）選者選（五選者共選）

（小田部・橘・田宮・福士・藤野選）

下手くそな運針みたいに過ぎた日々だけど自分で縫ってきた日々　永田恵美

（小田部・木畑・清水・鈴木千・津金選）

この街にこの夜を生きるものとして大き鼠と吾とすれちがふ　前中　映

（風間・桑原・津金・藤野・松尾選）

天ぷらをからつと揚げる人ですと現在形で言へるしあはせ　森田治生

（影山・狩野・鈴木千・田中・松尾選）

せんせんと蟬の声降り　落蟬は死後はじめてのあさかぜのなか　小島ゆかり

Bグループ歌会（Ⅰ・Ⅱ）報告

待ちに待った大会が四年ぶりに開催された。意見の多く出た歌をあげる。

・わが打ちし蕎麦のそば湯をつかひたる妻のゼリーが夏を冷やせり

リズムがいい。そば湯のゼリーという当たり前でない内容や表現に親身が感じられる等、好評価が多かった。

・絵はがきを立てかけるとき〈PM〉とあるささやかなサインに気づく

謎に満ちた〈PM〉色々な意見が出た。作者によってビート・モンドリアンと最後に判明。

・手話かはす老いしふたりの目と指に溢れてゐます信頼の文字

評者から、観察者の歌は作らない。「老いし」は「老いたる」に。障碍者の歌は詠まない方がいいと高野先生の教えも加えられた。

・ふるさとの風澄む谷の川をきて山のかけらをひとつ拾いぬ

「風澄む」が好評。「山のかけら」は「石」でも「松ぼっくり」でも。つきつめていないところがいいとの評あり。

・あおぞらに入道雲わき蟬なきて夾竹桃さく夏にだかれぬ

はじめ下句は性愛の歌かと思ったという評が出て盛り上がった。その方が楽しいとの意見も。上句は盛り込みすぎて重複しているとの評もあった。（村田淳子）

Cグループ歌会（Ⅰ・Ⅱ）報告

一首に付き評者は席順で二名、選者一名、最後に小島ゆかり氏の講評で行う。

前半から活発な意見が交わされた。一首の感動はどこか、具体や

大会詠草（2）全体互選高点歌（既出の作品は作者名のみ記す。以下同様。）＊会場での表彰は選者作品を抜いた順で行った。ここに記すのはその対象者。

（一位）永田恵美（二位）森田治生（三位）前中映
（四位）中村敬子（五位）四野宮和之・宮内博子
（七位）谷真樹・藤岡成子・森田卓子

散歩する朝（あした）の足はよろこびて休み休みに空の裾ふむ　中村敬子

冷えすぎずジューシーでした遠き日の井戸に丸ごと浮かべた西瓜　四野宮和之

誰よりも背すぢをのばしゆつたりと電車を待てり白杖の人　宮内博子

老人の弾く「月光」が吹き抜けに吸い込まれゆく街なかピアノ　谷　真樹

手話かはす老いしふたりの目と指に溢れてゐます信頼の文字　藤岡成子

雲海を飛び交ふ二羽の岩つばめ「とびませんか」と私をさそふ　森田卓子

大会詠草（3）グループ高点歌

〈A〉（一位）永田恵美・前中映（三位）谷真樹
〈B〉（一位）森田治生（二位）藤岡成子（三位）岩本豊子

ふるさとの風澄む谷の川をきて山のかけらをひとつ拾いぬ　岩本豊子

〈C〉（一位）佐藤彩湖（二位）榛葉貞代・尾崎潤子

待合室の話題は今朝の「大谷さん」楽しそうなり母の通院　佐藤彩湖

榛葉貞代

季節感が欲しい、などである。

・国籍を与へられずに眠る子よ小さき団扇を祈り手にして

結句の解釈に迷うという評があった。歌意も一首で解るのは難しと。しかし、それにチャレンジしているという評もあった。

・青虫が蝶になるのは解せぬらしされど子の好きな「はらけぽあおむし」

助言者からの指摘。この歌は口語と文語のミックスである。ミックスは一首に効いているかが大事な事。よって口語に統一して「解せぬらしされど」を「わからないけれど」にすると良いとあった。

・トルドー氏〈じっくり見たい〉と資料館をただひとりにて再び訪ひぬ

助言者からの指摘。この歌には弱い部分と良い部分がある。前者はネットニュースそのままである。後者は「ただひとり」である。三句と四句を倒置して「ただひとり原爆資料館を」と助言を得た。

全ての歌に小島ゆかり氏の講評を頂けた。（能勢玉枝）

Dグループ歌会（Ⅰ・Ⅱ）報告

一首につき二名の評者と三～四名の選者が意見を述べた。四名の欠席があり、二十二名での歌会となった。

・深更の駐輪場をぎこちなく蟬歩きをり月を曳きつつ

ていねいに詠まれている。特に「ぎこちなく」がいい。「月を曳きつつ」について評価された一方、月影を曳いているのではないかなど、いくつか意見が出たが、作者が月を曳くと詠んだのだから勝手に月影と解釈してはならないのでは等の意見も出た。

赤リンゴ両手につつむ夕まぐれわれにも何かまだ出来さうな　尾崎潤子

青虫が蝶になるのは解せぬらしされど子の好きな「はらけぽあおむし」

〈D〉（一位）黒岡美江子（二位）三沢左右（三位）森田卓子

胎児いまどんぐりほどの大きさと言ひつつ孫のひとみが潤む　三沢左右

深更の駐輪場をぎこちなく蟬歩きをり月を曳きつつ　黒岡美江子

〈E〉（一位）宮内博子（二位）立石千代女

（三位）柴田佳美・中川暁子・久保田智栄子

Hey Jude友と歌ひつつ下校したあの日もこんな夕焼けだつた　立石千代女

聖歌隊つどへるやうな純白の小花をつけるスイートバジル　柴田佳美

田草ひく友の白シャツ見えてをり緑勢ふ七月の田に　中川暁子

「父の骨すこし食べた」と友は言ふ散骨まへの静かな海で　久保田智栄子

大会詠草（4）題詠（題：「窓」と「人名」のある歌）

＊選者＝田宮朋子・大松達知

〈田宮・大松共選〉

田宮二位・大松五位

我がためのすべての窓を閉めて観る死神役のブラッド・ピット　工藤玲音

田宮七位・大松八位

夕ぐれて灯ともる窓にまたひとつパウル・クレーの天使あらはる　百留ななみ

大松九位・田宮十位

西郷と大久保の見し噴煙を窓開けて見る秋の夕暮　丸山克介

・紅色のつぼみ綻び香り立つ朝露の庭の一輪のバラ

映像の見える美しい歌であるという意見の一方で、作者にとってなぜこのバラなのか、その息づかいや感動のポイントが漠然としていることが残念との評があった。また、漢字「薔薇」の方がいいという意見も。

・どこまでもどこまで行つても一人なり伊豆七島の海の深さに

山頭火の俳句を意識している歌で気持ちがよくわかる一方で、海に対する作者ならではの思いがほしいという意見も出た。作者はどこにいたのだろう、海を見ていたのか、あるいはダイビングしているのか、など意見が出された。

（三浦陽子）

Eグループ歌会（Ⅰ・Ⅱ）報告

自己紹介の後、四野宮氏の司会のもと二十三名で開会。

・蟬声と雨音ふいに入れかはる夏盛りなる一石日和

蟬声を「せみごえ」とすると意味が変わってしまうため、「せんせい」と読むことが正解であるが、並列の「あまおと」、「一石日和」と呼応させるためには和語に置き換えられるとより良いのではないか、との助言があった。また、結句の「一石日和」が読み手を惹きつけるフレーズとして成功しており、歌を魅力的にしていると評された。

・「父の骨すこし食べた」と友は言ふ散骨まへの静かな海で

ショッキングな内容の歌意について、解釈が分かれた。作者と友との関係、友と父との関係、友の性別など背景が見える情報があると良いのではないかとのことで、友が女性である場合は、会話文末を「食べたの」とすることで可能になるとの助言があった。

また、他の歌について、助詞の置き換えにより状況が解りやすくなることや、「べし」の文法的意味の理解方法として「すいかとめて」①す…推量②い…意志③か…可能④と…当然⑤め…命令⑥て…適当と覚えるコツなど、一同深くうなづく場面があった。

（宮内博子）

〈田宮朋子選〉

一　獄中のナルゲス・モハンマディさんは窓から望むオスロの空を　中津川勒坐

三　小窓から光の粒が銀幕に届きビビアン・リーを立たしむ　伊沢　玲

四　磨きたる窓朝露のごとひかりむかうから覗くアンリ・ファーブル　小島ゆかり

五　宮柊二選に入りたる遠き日に歌といふ明かり窓を知りにき　木畑紀子

六　ささやかな年金ぐらしのわが窓を覗きゐるらんラスコーリニコフ　小田部雅子

八　はめごろしの窓の向こうは夜の雨ピーターパンも飛んではこない　岡田美子

九　西向きの窓の簾を上げるたび母からかひき清少納言と　中川暁子

〈大松達知選〉

一　秋の陽が高橋是清邸内の窓の硝子のゆがみを照らす　勝木尚子

二　西日射す下宿の窓辺の文机の上に置きゐき魯迅の写真　前田　明

三　コックピットの窓より神が見えたとうアイルトン・セナ逝きて三十年　三木裕子

四　窓のなき掘立て式の宮殿に孤独をかこち卑弥呼はゐたり　清水正子

六　窓枠のほこりが二か所うするるをもう一度見る金田一耕助　田中愛子

七　世界中のだれからも遠き海底（うみそこ）にサン・テグジュペリの窓濡れてをり　三沢左右

十　窓を開け雀にパンを撒きゐたりヴィトゲンシュタイン朝の日課に　吉田史子